広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	日本近代文学に現れた女性像
Author(s)	ナムテイップ セーテー,
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集 , 1989 : 15 - 27
Issue Date	1990-03-15
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00039259
Right	
Relation	

日本近代文学に現われた女性像

ナムテイップ　セーテー

はじめに

歴史が記述され始めたころから女性の生活の場における多くの悲劇が展開された。長い間、女性は旧道徳、旧因習に裏打ちされた男性中心の封建社会の支配に縛られ、従属的な位置に甘んじるほかはなかった。文学に登場する女性達にもその影響が濃厚に影をおとしている。現存している古代の筆記文学－聖書の中にも人類の誕生についてはこの世に初めて登場した女性イブが男性のアダムに奉仕するためにアダムの体の一部から作られたと書かれている。もちろん女性の悲痛な歴史を考える上で、日本人女性を忘れてはいけない。現在、日本は経済、政治的な面において世界の頂点に立っているが、社会的な面においてまだまだ「男尊女卑」とも言える閉鎖的なイメージが根強く残っている。しかも、この男－女それぞれを分離するところは日本文化、日本社会の構成の独特な特徴とも見られる。日本文化、日本風の思想を理解するためにはこの点を見落としてはいけないと思う。男性中心の日本社会の中に女性達は誰にも知られず、それと形に残ることもしないが柱を支える土台のように、蔭にかくれて男性や家を支えて来た。その忘れられた存在となった女性達は文学の中に姿を現して、世間に訴えたのである。

日本文学史を遡ってみれば、特徴としては初期から女性作家は活躍し、代表作品はほとんど、女性作家に書かれたことである。その割には物語に現われた女性達の生命はあまりに惨めで悲しい。男性の政権争いの道具に使われて強制的に嫁がされた王朝時代の女性から封建社会の儒教の思想にとらえられ、忍従と家を守ること以外には生きる技術を持たせられなかった江戸時代の女性まで、みな、「人形」のように扱われた。その人形達は「人形の家」を飛び出そうとしたのは日本社会が封建的な制度から解放され、近代化、西洋化を求めた明治時代である。新しい時代を迎えるとともに「新しい女性」も「時代の不思議な目覚め」を自覚し、女性解放を実現するために闘い始めた。日本社会のみならず、彼女達は地球上の女性に対して、男女平等社会の実現に向けて歴史的な役割を果した。

こういったわけで、ここでその「新しい女性」の中から何人かの典型的な代表を取り上げて、彼女達の「闘いぶり」を見ていきたいと思う。

『斜陽』（太宰治）のかず子

世が変わっていくと共に貴族達はそれまでの生活から転落していき、激しい変動の嵐に身一つで立ち向かわなければならなくなっていった。斜陽の中には貴族の没落を背景として厳しい現実の世界の中で一生懸命に生きていこうとするヒロインかず子の肖像がビビッドに描かれている。

かず子は貴族の一人として上流階級社会の環境の中で、教育を受け、豊かな教養を身に付けて育ってきた。しかし、一家を支える父が死んだ上に、結婚生活に失敗して、実家に戻ってしまう。そこで母と二人きりで暮らしていた彼女は今まで世話をしてくれる叔父に家の経済の困難な状況を知らされ、お姫さまを夢見るような甘美なメルヘンの世界から目覚め、不幸な現実を認めなければならない。

戦争が終わって世の中が変わり、何の職業もない母と娘二人にはとても元通りの上品でぜいたくな暮らしを続けてはいけなかった。叔父の勧めによって東京の屋敷を売り、田舎の伊豆の小さな山荘へ移り、二人きりでわびしい生活を始めたかず子と母にとっては、二つの世界での生活間のギャップは、まさに生きていられないというような状況であった。「ああ…お金がなくなるということはなんというおそろしい、みじめな、救いのない地獄だろう…。」「…私たち二人がかわいそうで、いくら泣いてもとまらなかった。泣きながら、本当にこのままお母様といっしょに死にたいと思った。もう私たちは何もいらない。私たちの人生は、西片町のお家を出た時に、もう終わったのだ」とこんな弱気な態度をとるのだった。しかし、かず子はかえって「丈夫になり、今まではヨイトマケ商売にもひそかに自身を持っ」ているし、また、畑仕事にも別に苦痛を感じなくなり、「だんだん粗野な下品な女になっていくような」気がする。

それとは裏腹に、かず子とは対照的な存在であり、「日本の最後の貴婦人」である母がだんだん病弱になっていく。そうした事態をかず子は「お母さまからどんどん生気を吸いとって太って行くような心地がしてならな」いと感じている。

娘のかず子が新時代に向かって周りの変化に身を適応していきながら、その彼女が蛾のように昔の世代の象徴で、古典的でデリケートな母を「犠牲にしてまで太り」という強いもの、世に適応できる者しか生きていけないという社会の悲しい現実でもある。直治の言った「早く死にゃいいんだ。こんな世の中にママなんて、とても生きて行けやしねんだ…」のように現実とは没交渉の世界にしか住めない、美しい彼女は「気高く逝かなければならない。戦後の新現実では彼女は死によってしか貴族としての生を貫きえなかった」のである。

これといって定職を持たずに、細々とものを売って得たお金に頼って生計を立てていた娘と母は「ままごと遊び」みたいに毎日毎日花を植えたり、あみものをしたり、おしゃべりをしたりと、平和な日々を送っていたが、戦争のために南方に派遣されていた弟直治が

帰ってくると同時に、二人の生活の中に邪悪な現実社会が乱入してくるのである。

「あなたものを売って、これから先、どのくらい生活して行けるの？」と農家の娘に問われたかず子が「私にリアリズムはありません。こんな具合で、生きて行けるのかしらと思ったら、全身に寒気を感じました。母も病人のようで寝たり起きたりだし弟もアルコール中毒でものを売ったお金だけで生活するのもそう長くはないと彼女自身はわかっているのである。そして、こんな情けなく何の希望も生き甲斐もない生活から脱出し、厳しい現実社会を生き抜いていくためにもかず子には夢とまではないにしても、疲れた心をいやしてくれる何かが必要であると痛感していたのである。そんな時直治の帰還がかず子に、彼のつきあっていた作家上原のところに六年前に一度だけ訪れた際に唇を奪われた「ひめごと」をよみがえらせた。彼女は「女大学」時代に教えられた道徳などを無視して思い切って上原に手紙を書いた。「…六年前のある日、私の胸に微かな淡い虹がかかって…中略…私の生命を先に消さなければ、私の胸の虹は消えそうもございません。…」「お返事がないので、もう一度お手紙を差し上げます…中略…私はあなたの赤ちゃんを生みたいのです。他の人の赤ちゃんは、どんなことがあっても生みたくないんです。…」「このような手紙を、もし嘲笑する人があったら、その人は女の生きて行く努力を嘲笑する人です。女の命を嘲笑する人です。」「もう一度お目にかかりたいです。それだけなのです。…ああ、人間の生活には、喜んだり起こったり悲しんだり、色々の感情があるけれどもそれは人間の生活の一パーセントを占めているだけの感情で、あとの九十九パーセントは、ただ待って暮らしているのではないでしょうか…朝から晩まで、はかなく何かを待っている…生まれて来てよかったと、ああ、命を人間を、世の中を喜んでみとうございます…」とかず子は上原に道徳を押し退けるべきだと誘い掛ける。このことは彼女自身の戦いであり、上原は彼女にとって革命への賭の対象であった。しかし、彼女が上原宛てに送った三通の手紙のいずれに対しても彼からの返事はなかった。その間、かず子にとって過ぎ去りかけている旧道徳世界と彼女を結び付けている最後の一本の糸である母が「人と争わず、憎まず恨まず美しく悲しく生涯を終」わる。生き残ることは大変醜く、汚いことのように思った彼女だが、「私は生き残って思うことを仕遂げるために世界と争っていこう」と強がりを見せるような決心をする。

そうして彼女の戦闘が始まる。かず子は上原に会いに東京へ向かって旅立っていく。だが、上原は彼女が憧れたあの六年前の有名な作家上原とはおよそほど遠い存在になっていて、「蓬髪は…哀れに赤茶けて薄くなっており、顔は黄色くむくんで、目の淵が赤くただれて…一匹の老猿」のような別人みたいに変容してしまっていたのである。「駄目です。何を書いてもばかばかしくって、そうしてただもう悲しくって仕様がないんだ。いのちの黄昏。芸術の黄昏。人類の黄昏…」とつぶやく上原もただその変わっていく世の中の一人の「犠牲者」に過ぎなかった。上原に再会し、一夜を共にしたが、かず子の「ひめごと」の恋は消えてしまってあの六年前の上原と一緒に死んでしまったのである。

しかし、本当の戦いはまだまだこれから先である。母、弟、それに憧れの対象の上原を一切失ったかず子には革命の収穫として、上原との間にできた「おなかの中の小さな生命」が「孤独の微笑の種」になった。そして彼女は自分が戦闘の一回戦に勝利を得たと思っている。そして生まれてくる子供と一緒に二回戦、三回戦とこれから先の本当の戦いを続けていかなければならない。

旧道徳の枠を抜け出したかず子だが、実際にはその後の現実の重みに耐えて生きていく彼女の姿は「斜陽」では描かれていない。そのために“彼女の勝利”を疑う立場の議論も少なくない。

「三代の女たち」（昭和５５）ではこう述べられている。「…だが「新しい道徳革命」は、はたして実現したといえるか。復活を夢見て自己破壊を試みる彼女の行動は自らを美しい犠牲者として彩ることになるが、それ以上の強みとはならない…」

たしかにかず子は痛ましい犠牲者の一人であるが、彼女の生き方は薄暗い「斜陽の世界」に微かな光を与えるものである。彼女は敗北者と見られるかも知れないが彼女の奮闘が単なる無駄骨かといえば、決してそんなことはない。革命の成功のためには、多少、先駆者、すなわち犠牲者が必要条件だからである。一人倒れてもまた一人出て来て、最後の勝利をあげるまでその繰り返しを続ける。女性達の長い戦いの歴史の中にこんな「美しい犠牲者“かず子”」のような女性が何人もいる。

『斜陽』の作者の太宰がかず子のモデル、大田静子との間に子供まで作りながらも他の恋人と心中してしまったが、その静子は太宰の忘れ形見、そして、彼の恋、革命の証拠となった私生児を生み、愛と思い出を支える力にして女一人の手で愛児を育てていったのである。

結論の出ない『斜陽』であるが、ヒロインかず子はきっと悲しみなどをこらえて、そのモデルの静子のように厳しい現実の世界に立ち向かって、精一杯戦いながら生きていったのではないだろうかと私は思っている次第である。

『雁』（森鴎外）のお玉

『雁』の舞台は明治十三年の東京に設定されている。その頃、国民は旧態依然とした封建的な社会、絶対主義の政治からの民主化と解放とを求め続け、社会の一部には強く積極的に生きている女性の姿などあるが、一般的にはまだまだ正しい意味での女性の自我の確立ありえない時代である。

そこに登場する女性主人公のお玉は「女大学」時代に教えられる通りの一親につかえ、夫に従う一ほかに自我とか自分の意志とかいうものを全く持たない、もっとも典型的に古風な女性である。父親を幸福にするために自分のことを構わず、人の妾にまでなって、忍び、あきらめという言葉だけを自分に言い聞かせて生きてきた彼女は偶然的な出来事で、自我に目覚め、人に支配されるばかりの生活から抜け出そうとする。しかし、またも偶然的な出来事でせっかく目覚めた彼女の道が簡単に閉ざされてしまう。こんな不運にもてあそばれたお玉の姿には当時の何百何千人かの日本女性の悲劇的な生命が乗り移っているのであろう。

『雁』の中には何人かの主な人物がいて、岡田を主人公と見る解説もいつくか見受けられるが、やはりこの物語の主人公はお玉とするべきであろう。『雁』ではお玉の成長、変化が他の登場人物との関係の中で、浮き彫りにされている。貧しいながらも父の愛情に包まれて素直で純情に育ったお玉は物語の最初に現われる際に、自分の意志といったものはなく、ただ周囲の状況という名の波に流されるまま、運命に身を任せ、黙って押し流されていくだけだけの女である。戸籍調査に来た巡査に押し掛け婿として入り込まれた彼女はその男が実は国元に妻子がいることを知り、井戸に身を投げようとしたこともあった。結局「親の貧苦を救うために自分を売る」という捨て身の決心までして高利貸末造の妾になるお玉であったが、魚屋の上さんに高利貸の妾であるということで侮辱をされ、末造にだまされたことがわかった彼女は初めて「悔しい」と感じるのであった。それは魚屋の上さんが憎いとか末造が憎いではなく、ただ何の悪いこともしない自分が「余所から迫害を受けなくてはならない」ことを思うと悔しくなったのであろう。それに以前は何でも打ち明けられる父であったが、その父にこのことを訴えてもただ父に苦労をかけてしまう結果になりかねないと気づいたお玉は、自分一人でこのせつなさを畳んでおこうと決心するに至り、「私はこれで段々えらくなってよ。これからは人に馬鹿にされてばかりではないつもりなの。」と父に宣言する。こうしてお玉は「これまで自分の胸の中に眠っていたあるものが、覚醒したような、これまで人に頼っていた自分が思いがけず独立した」ような気になる。それが彼女における自我の目覚めとも言えるものである。お玉は自分でものを考えたり、行動したりするようになり、これまで秘密、隠し事などのなかった単純な彼女は小さな虫がミミクライを持っているように末造の鋭利な観察から自分をカバーする。だが元々彼女の自我の目覚めが、単なる魚屋の上さんの侮辱に対する反発であったり、人にだま

された自分が悔しくなったりする程度の、すなわち周囲の状況に動かされた受け身的な態度であって、彼女自身の内部から自分をつき動かすほどの確実で積極的な目標があるのではない。彼女にはまた自分から周囲の枠を抜け出し、自分で自分の道を決め、新しい人生を始めようとするほどの決心はつかない。ただ眠り姫が白馬に股がった王子様が助けに来てくれるのを待っているかのように、「往来を通る学生を見ていて、あの中に頼もしい人がいて、自分を今の境遇から救ってくれるようにはなるまいか」とただ考えるのみであった。それで、たまたま彼女の理想通りのような男、岡田が現われ、彼女の夢を実現したかの様な気分にさせてくれる。最初のうちはお玉にとって岡田も窓の外を通るただの学生の一人に過ぎなかったが、容姿端麗でりりしく、頭脳明晰な岡田がいつか、お玉の心の中に大切な存在として占めるようになり、彼女が毎日窓から外を見ていて彼の通るのを待つようになる。ただおとなしい性質のお玉には自ら相手に恋を語ろうとする思いはない。

末造がお玉に買ってやった紅雀はお玉と岡田とが言葉を交わすきっかけとなる。ある日お玉の家を通りかかった時に蛇が鳥を食おうとする事件に遭遇、蛇を殺して鳥を助けてくれた岡田とはお玉はとうとう言葉を交わすのであった。

これまで目で会釈をしたことしかない岡田と新しく話をしたために、「自分の心持ちが我ながら驚くほど急激に変化してきたのを感じ」る。

お玉にはこれまで「欲しい物」の岡田が、「買いたい物」となり、彼女の岡田に対する思いをますますつのらせる。末造と一緒にいる時にも表面だけ調子を合わせ、頭の中に岡田のことを思い続け、「夢の中で岡田と一緒になる」ことまで想像するようになってしまう。元々は壇那の許可を得ないまま父の所に行くことさえ恐れるほどの純真無垢な娘が、「急激な身の上の変化」のために「世間の女が多く男に触れた後にわずかに男から得る冷静な心と同じような」心になり、鋭い末造の目にも簡単に見抜かれないほどのたくましさを見せるに至った。

ここまできて、お玉の自我はようやく自分自身の自我の道を歩みだそうとするのである。ある日ようやく絶好のチャンスが彼女に訪れる。末造が千葉へ立って、翌日に帰ることになったので、梅を実家に帰らせといった具合に、第三者を片付けてしまったお玉は岡田に自分の気持ちを伝えようと決心する。「今日はどんな犠牲を払っても物を言い掛けずには置かない。」と。しかし、お玉がそう心に念じて、思い切って決意を実行しようとする日は実は岡田がドイツへの留学の準備のために本郷の下宿を引き払う前日の日であった。その日には「いつも薄紅に整っている岡田の顔は、確かに一人赤く染まった。そして彼は偶然帽子を動かすらしく装って、帽子の疵に手を掛けた。女の顔は百のように疑っていた。そして美しく光った目の底には、無限の名残惜しさが含まれているようであった。」お玉と岡田とが通りかかった時に二人の顔を見比べた友人はこう述べる。彼もその運命を決めた瞬間に気づいたのである。もしも岡田の下宿で青魚の味噌煮が出なければ、彼の散歩に

連れが同行しなかっただろうし、そして岡田が思いがけずに投げた石に当たる「不幸せな雁」も出なかったであろう。多少お玉に気がある岡田が彼女と二人きりになり、彼女の気持ちがわかれば、彼が彼女の気持ち応えるかも知れない。そうすると二人が永遠に結ばれないという悲惨な運命を選ばすに済むのであろう。

しかし、運命は偶然の産物である。散歩の岡田が無縁坂まで足を延ばしたものの、末造が紅雀を買ってお玉にあげたのも、岡田の下宿の夕飯に青魚の味噌煮が出たことも、彼の友人の一人がそれを大嫌いだったことも、投石が雁に当たったことも、一つ一つはほんの小さな偶然の出来事に過ぎないが、そうした偶然が結び付いて、「車の輪の釘が一本抜けていたために、それに乗って出た百姓の息子が種々の難儀に出会う」という話のように人間の運命の岐路が定められていく。その「不幸せの雁」も、お玉の悲劇的な運命の象徴であり、彼女の人生はほんの小さな周囲の状況によって簡単に揺り動かされてしまい、何気なく投げられた石に当たって死んだ不忍池の雁のようなものである。

せっかく自我に目覚めたお玉であるが、彼女の生きている時代、社会の状況には彼女の選んだ道をそう簡単にはかなえさせてくれないものがあった。岡田が投げた石に当たって、はかなく殺されてしまった雁の哀れさはお玉、そしてお玉のような女性達の生の哀れさを象徴するものになっているのであろう。

『浮雲』（二葉亭四迷）のお勢と『三四郎』（夏目漱石）の美禰子

両作品は同時期の近代日本の浮動性、そしてその過渡期の社会の中で生きている人間達の不安、苦悩などをテーマにしたものである。そういった点から見てみれば、両作品はいくつかの共通点を有しており、特に『浮雲』の女主人公お勢と『三四郎』の美禰子は作者の意図によって新しい女性のイメージを与える人物として描かれ、前者は日本の旧因習と西洋の新思潮の対立の中で迷いながら行く先が定まらない、風に動かされる「浮き雲」のようであり、後者は新旧善悪に間に彷徨する「ストレイシープ」のようである。二人ともまだ結婚していない、若い娘であるが、美禰子がお勢よりやや年上であり、彼女にはお勢には見られない女性としての魅力とたくましさがある。お勢は観念的な文三と実利のみに走る昇の間に迷った結果で、まだ世の中をよく知らないせいか悪い道に足を踏み入れてしまって、彼女の異性選択の自由というものは失敗に終わったが、美禰子の方は何人かの男性の間に迷いに迷っても彼女には常に冷静さがあり、利口に身を処し、結局現実の世界で彼女の人生に安定性を与えられる男性を選び、堅実な道を歩み出すのである。似たような彼女らであるが様々な環境条件によって彼女らの生き方に差異が生じている。

お勢は普通の家庭に生まれ、一人の弟がいるが両親、特に母親のお正にあまやかされ「何でもかんでも誠次第にオイソレと仕付けられたのが癖となって、首尾よくやんちゃな娘」に育てられてきた。学問、遊戯もよくできるし、おしゃれで容姿も美しいので、かなり自身を持っており、プライドが高い少女である。

日本の近代化、西洋化思想の流れの中に新しいもの好きのお勢も様々な新しい思想を受け取って「教育」とか「西洋主義」とか「男女交際」などの言葉を口癖にするようになっていた。

知り合いが娘の結婚を知らせに園田家へ挨拶にやってきた時、彼女は学問との無縁な嫁に対して、「旧弊」と非難した場面もある。そんなお勢は本当に「女学生」の全体の中においてみると、ひどく中途半端な位相である。

小学校を卒業をしたお勢は同時に本格的な女子中等教育からは外れたコースを選んで、女学校を名乗らない学系の私塾に入塾した。さらに、入塾してからの彼女は真剣に学問を吸収するどころかミーハー同士で「お茶ッぴい」的な性格のグループを結成し、ナンセンスなおしゃべりをしてばかりいて、そして、自分らのこだわっている「女大夫」先生が退塾したことがきっかとなって、「お茶ッぴい連」が解散になってしまう。そして、塾も面白くなくなり、塾を辞めて家に戻ってしまったのである。それによって、お勢は「西洋主義」の環境としては限られてしまうことになる。というのは西洋とかかわりのない普通の家庭に、教養のない保守的な母親のそばにおかれたからで、ある程度の「英学」を除くと、後は女学雑誌や新聞と言ったメディアを通しての「西洋」のみが彼女の前に開かれていて、それを模倣するしかなかった。こうして、いくら彼女が西洋主義、男女交際議論などを説

いたとしても、本当の西洋思想を認識することができず、また女性解方思想についてはあるレベルまでしか理解することができなかった。

一方、美禰子のほうがお勢より恵まれた環境に設定されている。両親が早く世を去った彼女は近代的、放任主義の若い兄の元に「家庭にいて、普通の女性以上の自由を有して、万事意のごとくふるまう」というようなお嬢さんに育った。美禰子にはミステリアスな美しさがあり優れた知性がある。彼女の英学教育は充分なレベルに思われ、「美しいきれいな発音」と評判される上で、たまに大学生の三四郎にでも分からないような単語を使ったことさえある。それは彼女の身のまわりには何人かの学者、思想家がいるためであろう。高い教養がある兄、そしてその朋友等を含まれた学問界の人達との係わりによって美禰子はお勢より何倍も確実な「西洋」や「近代的な教育」に接触する機械がある。こういった点から見ると美禰子の学問や新思潮への興味にはお勢のそれより真剣さや熱心さがみえる。美禰子の西洋主義、女性解放思想についての理解はお勢より深く、正しくといってもまちがいないであろう。

お勢は美禰子と違って、彼女の周囲には西洋的な学識があり、彼女と色々な論理を話し合える人は文三しかいなかった。退塾して家に帰って久しぶりに再会すると、文三のおとなしくて学問好きな従兄の青年としての姿がお勢に新鮮な印象を与え、彼女の「男女交際論」を実践する対象として意識された初めての異性となった。文三と同じ屋根の下で暮らすことになり、彼に英語の個人教授を依頼したお勢は「口程にもなく両親に圧制られ」て「お嫁に行ッたりお婿を取ったりして仕舞った」親友達が味わえない新しい「男女交際」を通して「西洋主儀」の「異性選択の自由」を実験しようとする。

お勢は文三に新しい男女交際を期待しているが、彼は西洋的な学識がありながらも彼の思想はあまりに保守的で閉鎖的であった。周りは彼らの関係が従兄弟、親同士をこえると思われたように、文三も既に「彼女だって口へ出してこそ言わないが、何でも来年の春を楽しみにしているらしい」と一方的に決め込んでいたのである。確かにお勢は文三に対して多少好意を持っているように見えるが、「お嫁に往こうと往くまいと私の勝手で」と封建的な結婚観への抵抗意識を宣言した彼女には文三の勝手な思い込み通りになるはずはない。彼女にはプライドや「異性選択の自由」がある。免職となった文三から離れて、文三の気に入らない昇と親しくなるお勢は文三に「移り気、派手、軽はずみ」と非難されたが、まだ若くて、無邪気で、まだ世をよく知らない少女であり、気が移りやすい気質を持っていてもおかしくはない。特に免職になった文三の苦悩を通して見たお勢像は多少実際のお勢とは違っていて、文三への理解、同情の乏しい「移り気、派手、軽はずみ」な女性の象徴として読者の目に移るのではなかろうか。しかし、彼女は文三が免職になっただけで、いきなり将来性のある昇に乗り換えるほど尻の軽い女とは思われない。最初にお勢は母と喧嘩するほど文三の味方を勤めた。理解にこだわって現実世界に対応しない人間は生きていけないことにさえ気づかなかったお勢はただ文三から与えられた影響のままに理想が正

しいと判断しただけである。ただ残念なことに未成熟の若い娘の彼女は問題の重大さが分からない。文三の考えは正しいといっただけでは問題が解決するものではない。働き口ががなかなか見つからなくて落ち込んだ文三に同情したが、明るく元気なお勢は彼といつまでも一緒に落ち込むわけにはいかない。

そうしているうちにそこに男が二人の間に入ってきた。これまで文三以外の男性と交際したことのないお勢には選択といういい機会であった。そして二人の男性は対等のライバルとして競えるはずであるが、お勢の所有権を感じている文三には彼女が昇に気を移し、昇と浮気をするように考えてしまったのである。元は親しかった昇を敵と見て、自分の昇に対する非難に同意しないお勢が「心変わり」したのだと決め付けてしまった。お勢を愛しているといいながらも疑惑、嫉妬を抱いて彼女に喧嘩を売り、彼女を責め続けた。文三の言動に彼女のプライドを傷つけられてしまったお勢が文三を憎らしく思うのも無理からぬことである。理想を言いながらそれを実行することのできない文三に失望したお勢にとって彼女を文三の不当な見方から救ってくれたのは昇たった一人であった。お勢が昇に傾くことは現実性の勝利を示すものである。新旧対立の中で迷い、導いてくれる人、救いの手を差し伸べてくれる人が一人もいないという時代的な状況の中で、彼女の選んだ道がたとえ誤ったものであっても、それは無理からぬことであろう。

美禰子とお勢は同じく新旧対立の岐路に立って、迷いに迷って自分の自分の進むべき道を選ばなければならない立場である。

「他人志向型」のお勢は周囲の影響によって付和雷同的に導かれていくが、美禰子は、「内部志向型」で、あくまで自分の心の中にある迷いを解消してくれる何かを捜し求めるために彷徨を続けるのであった。自由に育てられた美禰子は、かなりの自身や独特の個性を持ち、強い自分の意志で行動する女性である。そのせいか広田先生は「あの女は心が乱暴だ。もっとも乱暴と言っても、普通の乱暴とは意味が違うが…」と彼女を批判した。美禰子は自分の美しさ、魅力を意識しながらも、それを駆使して周りの男性の心を引き付ける。こんな完璧な女性にはただ男性では彼女にかなうはずもなかった。自己中心の美禰子は与次郎の言うように「夫として尊敬のできない人のところへは初めから行く気はないんだから、相手になるものはその気でいなくちゃいけない」女性である。彼女の理想に近い尊敬できる「男性」はえらい学者の野々宮が「すっと高いところにいて、大きなことを考えている」のである。三四郎に対する彼女の誘い掛ける姿は無意識であるかないかははっきりとは判断できないが、彼女は三四郎と親しくするのが野々宮の気を引くためにはよいと思ったのであろう。美禰子に気がありながらも学問に専念するつもりの野々宮は自分の地味な性格と美禰子の目立つ性格とは正に反対であると自覚していて、彼女の気持ちに応じようとしないのである。いくら「偉い」女性と言っても、年頃になって、行く先の定まらない美禰子は不安な思いをしながら「ストレイシープ」のように夢と現実の間に迷っている。もちろん、彼女を迷いから救うことが出きる男性は野々宮以外はいない。菊見に行っ

た時、広田先生と野々宮から離れて迷ってしまった美禰子と三四郎が二人きりになり、「迷子だからちょうどいいでしょう。」と言ったこの彼女の発言は野々宮に届けようとする訴えなのである。三四郎もひきまわされた彼女は三四郎の好意には気づかないはずはない。だが、ただの平凡な学生の三四郎は彼女の理想にも現実にもかなわない。結局、美禰子は彼女の将来に安定生を与えられる社会的な地位や財産を持った男性と結婚することを選んで彷徨に終止符を打つのである。

美禰子もお勢もそれぞれの迷いの世界の中で迷いながらも自分の立場を捜し求めて、彼女らは女性の地位や社会のおける役割を高めようと勤める近代女性における開拓者的存在である。彼女らの選んだ人生はたとえ失敗に終わったとしても、選べない古代の女性より幸せということができよう。

まとめ

変動の激しい過渡期の女性は女大学の教えそのままに生きた古風なタイプもあれば、教養があり、自分なりに自由に生きていく新しい女性のタイプもある。ただ、旧とか新とか変わりなく彼女らは、たとえ形が違っても、それぞれ生きていくための闘い、苦悩がある。

男性中心社会に立ち向かって抗議をしていくのが新しい女性の、女性解放への闘いである一方で、封建的な流れの中に虐げられながらも、それに耐え懸命に生きることもその旧因習に縛られた女性達の闘いである。

このレポートに論じた四人の近代女性は誰も等しく旧道徳を捨て、新しい生き方を求めるが、彼女ら一人一人の動機、闘いぶりには別々の性格がある。同じく目覚めた女性のお玉とかず子といっても、お玉は貧弱で金や力のある者に対して抵抗力がないため、いつも損をしていた自分から目覚め、解放を求めたが、かず子は遺族の高い身分から転落し、現実の世界の中で生き残るために元の豪華な生活を捨てなければならなかったのである。

目覚めた者はその自分が目覚めた新しい人生への道に悩む一方で、最初から自由や自我の意志を持ったお勢と美禰子はそれなりの悩み一自由をどう使えば良いかに迷っているという悩みがある。いくら「新しい女性」といっても、彼女らはまだ初期のレベルに立って自分の持った「自由」を子供が新しいおもちゃを手にしたと同様に、どう使えば利口になるかがまだはっきり分からないようである。しかし、迷ったり、失敗したりしても彼女らの一生懸命に生きていく姿や闘いの努力は感動的である。こんな美しい犠牲者がいるおかげで現在社会の女性は昔の悲惨な、生気の感じられない人形のような運命から脱出することができたが、男女がまだ平等にならない限り女性は実際に解放されたとは言えない。

男女は生まれつきの体質が違っている。体力が男性に比べて劣るからといって、人間性まで劣るとは言えない。女性には男性に劣らない知性があるし、それに男性にはないやさしさ、デリカシーなどの特質がある。エゴイズムの男性が心を開いて女性のこれらの美徳な本質を認めないかぎり、平等の社会もありえないものである。

私達女性は女性存在を認められるために、家庭内で、また、社会で男女平等の分配、努力を獲得するために、ねばり強い闘いを続けなければならないと思う。

参考文献

太宰治	『斜陽』	岩波書店	昭和６３年
森鴎外	『雁』	新潮社	昭和５１年
夏目漱石	『三四郎』	旺文社	昭和４３年
二葉亭四迷	『浮雲』	新潮社	昭和６２年
長谷川泉	『鴎外文学の機構』	明治書院	昭和５４年
桑島玄二	『近代文学遊歩－３３人の作家と宗教』	伝統と現代社	昭和５７年
福田清人／板垣信	『太宰治－人と作品』	清水書院	昭和４６年
相馬生一	『太宰治』	津軽書房	昭和５４年
三好行雄編	『日本の近代小説Ｉ』	東京大学出版会	昭和６１年
村松定孝	『近代女流作家の肖像』	東京書籍株式会社	昭和５５年
尾崎秀樹	『三代の女たち』	ふみくら書店	昭和５５年
小堀桂郎	『森鴎外－文業解題』	岩波書店	昭和５７年
十川信介	『二葉亭四迷』	筑摩書房	昭和５７年